

# 高尾山慶賛会入会のおすすすめ

「物で栄えて心で滅ぶ」という言葉は、昨今の世相を端的に表現しているようです。

経済発展の代償として、公害、交通禍、その他様々な弊害が生じ、経済的には豊かになりながらも、心は貧しく刺々しくなり、社会全体が人々の「迷いの心」で覆われております。かかる時代にこそ、心に「うるおい」を与え、存在として信仰心が必要であり、信仰の温かい心を通して愛情、尊敬、感謝などの心を養い、人間味豊かな社会を建立したいものと念願しております。

高尾山は現在「ミシユラン三ツ星」を頂き、『心のふるさと祈りのお山』、世界に冠たる高尾の自然』と称せられ、多くの参拝者が来られています。

こうした恵まれた自然環境の中にある薬王院には、古来より僧侶だけではなく、広く一般からの篤志家が参加して行われる、多くの年中行事が伝承されております。高尾山慶賛会は、こうした各種の行事を奉賛し、以て御本尊を尊信し、その御加護を仰ぎ明るく温かく、そして豊かな生活を送ることを目的とするものであります。

ぜひとも茲に広く高尾山慶賛会員を募り、ご加入ご協賛を頂き、ご本尊様の威神力に浴されますよう念願するものであります。



侍衣装を着た慶賛会の皆様

## お申込・問合せ

年会費 一口五千円

申込方法

お手数ですが「高尾山慶賛会係」までお問い合わせ下さい。申込用紙を発送致します。

〒一九三・八六八六

八王子市高尾町二二七七

高尾山薬王院「慶賛会事務局」

TEL ○四一・六六一・一一一五

FAX ○四一・六六四・一一九九

# おはなし散歩道 八分ぎつね

柏市 木村 研

高尾山には、昔からたくさんの方が、お参りにやってきました。

あるとき、参道わきの茶店で、大店の娘が名物のまんじゅうを五皿も注文して、「おいしかったわ。おかげで元気ができました。では、もうひと頑張り」と、お代を払って、大急ぎで山道を上っていました。

茶屋のおばあさんが娘を見送って店にもどり、銭を店の奥につるしたかごにほうりこむと、銭の音がしません。調べてみると、一枚だけが本物で、後は、全部木の葉に変わっていました。

「しまった。キツネだったのか」  
おばあさんは、たいそう悔しがりましたが、もう後のまつりでした。おばあさんは、まんまとキツネにまんじゅうを食べ

られてしまったのです。また、あるときは、街道沿いの小間物屋に、身なりのいい侍が現れて、「あるじの使いで、これから、藤沢まで行かなければいけない。そこで、代えのわらじを十足ほど売ってもらいたい」と、いった。

お侍が頭を下げるなんて、よほどのことだろうと、店番のおじいさんは、わらじにひもを通して、腰に下げてやりました。侍は、たいそう喜んで、「かたじけない」と、銭を払うと、急いで街道を下っていきました。

「ご苦労なことじゃ」  
おじいさんは、侍の姿が見えなくなるまで店の前に立って見送りました。ところが、手の中が妙に軽いです。ゆっくり手を開いてみると、にぎ



ついていた銭は、一枚だけが本物で、後はみんな木の葉になっていました。「やられた。あの侍も、キツネだったのか」  
おじいさんも、たいそう悔しがりました。それなのにキツネは、面白くてたまりません。いろんな所で、村人をだまして喜んでいました。そんなある日、このキツネが、人間に捕まりました。

居酒屋で酒を飲んでいるうちに、酔っぱらって寝込んでしまったのです。しっぽをだしたまま眠っていたものですから、荒縄でぐるぐるまきにされて、高い木に吊るされました。そして、下で火を焚かれ、煙でいぶされたものですから、たまりません。

# 飯綱山火まつり

八月十日 於・信州飯綱山麓

去る八月十日、信州飯綱山麓大座法師池周辺にて、当山菅谷執事長御導師の下、飯綱山火まつりが行われました。日暮れを迎え、夜の帳が下りる午後七時より儀式が始まり、柴燈護摩壇から立ち上る炎が暗闇に包まれた道場を照らす中、参列の皆により、祈りが捧げられました。



燃え盛る火焰が暗闇を照らす

「ごめんよ。もう、二度と悪きなんかしないからかんべんしておくれよ」  
キツネは、泣いてあやまりました。  
しかし、村の衆の怒りはおさまりません。  
「おまえのいうことなんか、信じられねえ」  
「そうだ、そうだ。たたき殺してしまえ」  
「毛皮にしてしまえ」  
大騒ぎをしているところに、旅のお坊さんが通りかかり、  
「聞けば、このキツネは、わずかだが銭を払っているというではないか。なかなかと感心なやつ。どうか、今度だけは助けてやってくださらんか」と、いいました。  
「何が、感心なものか。盗人は、盗人だ」  
村人の怒りはおさまらない。

そこでお坊さんは、村の衆に話し始めました。「みながいうのも、もつともじゃ。だが、わしらは人間じゃ。人間というもの、どんなときでも村八分。つまり、二分は残すであろう」  
「当たり前じゃ。火事と葬式は別じゃ」  
「そうである。それでこそ人間。だから、こやつにも、二分だけ残してくださいませんか？」  
「二分を？」  
「そうじゃ」  
お坊さんは、何度も頭をさげました。あんまり坊さんが熱心に頼むので、村の衆も、  
「今度だけだぞ」  
と、キツネを放してやりました。  
お坊さんは、村の衆に礼をいうと、西国の方を下っていかれました。  
ところが、性悪キツネ、それから村人をだまして、ご馳走にありついていくというのです。  
ただ、お坊さんにいわれたことを守っているのか、二分だけは銭を残していたそうです。  
だから、「八分ギツネ」と呼ばれたそうです。  
(おわり)

(さし絵・小出 茂)